

<資料紹介>

江賀寅三関係資料：目録と紹介

小川正人

- <もくじ> I はじめに
II 江賀寅三関係文献目録
III 資料 ・北海道開発功労者の声：江賀寅三
・江賀寅三年譜

1 はじめに

筆者はさきに、「北海道旧土人保護法」「旧土人児童教育規程」下のアイヌ教員のひとりとして江賀寅三（1895～1963）に焦点をあて、その活動を検討した⁽¹⁾。このたびの報告は、その延長線上の作業として、これまでに筆者が確認できた江賀寅三関係の文献を目録化し、江賀寅三の足跡、ひいては近代アイヌ史の一側面を解明するための基礎資料とすべく提出するものである⁽²⁾。目録に収める資料は、原則として公開された文献に限定した。未公開資料については、現時点までに筆者が確認できたものの多くは、大別すれば『アイヌ伝道者の生涯 江賀寅三遺稿』が収録している（内容は後述）ものか、吉田巖遺稿資料中のもの⁽³⁾であり、今回改めて紹介することは省略した。

併せて、江賀の年譜と江賀が自らの生涯を回顧し略述した「北海道開発功労者の声」収録の江賀の語りを文字化したものを資料紹介として掲げた。両者ともに江賀の履歴を示す資料として目録の情報を補うもの考えるからである。年譜は前稿にも掲載したが、その後の調査により若干の

(1) 小川正人「『北海道旧土人保護法』『旧土人児童教育規程』下のアイヌ教員—江賀寅三と武隈徳三郎を中心に」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』2号、1996年3月。

(2) 筆者が江賀寅三に着目した問題関心については、同前97～103頁に述べたので繰り返さない。また筆者は、アイヌ史研究、アイヌ文化研究において、関係文献情報の整備と、未公開あるいは希少な資料を丁寧な整理とともに公開していく作業とが、特に今後は文献学的研究の比重が増さざるを得ないと推測するだけに、重要な基礎作業として課題になると考えている。

(3) 「虻田学園日誌」（資料1-35,36）はその主なものの一つである。この他にも北海道立図書館が所蔵する同資料のコピーの検索からだけでも若干の資料の存在を知ることができる（この点については一部を本田優子氏より教示を受けた）。吉田巖遺稿については、現在吉田巖遺稿編集委員会が整理・公開を進めており（整理作業の概要については「吉田巖遺稿資料整理の概要」『吉田巖 資料集1』1995年3月、帯広市教育委員会、3～4頁を参照）、その成果を待ちたい。

補正を加えることになったので、今回改めて掲載した。後者の録音資料は、これが未公開の資料で、かつ江賀の生涯を略述するものとして目録の情報を補うものだと考えたと同時に、内容上でも若干ではあるが着目すべき情報を含んでいる⁽⁴⁾と考えてのことである。

本目録は従来の江賀寅三関係資料の情報⁽⁵⁾の域を大きく越え、特に戦前の江賀の教員ならびにキリスト教伝道者としての足跡については、既存の伝記的文献を補う情報を含んだ文献も幾つか含むこともできた⁽⁶⁾。他方で、戦後のキリスト教伝道とりわけ静内新生教会設立に至る経過に関わる資料、また戦前ではサハリンでの活動やエスコタン建設運動などについては、相当量の資料があると推定はできるものの、まとまった調査には至らなかった。今回調査した雑誌、新聞等も本来は悉皆調査を行うべきでありながら、ごく限られた範囲の調査にとどまったものも多い。このことと関わって、資料の存在を知ることはできたものの、所在や内容等を確認できなかったものも幾つかある⁽⁷⁾。以上の諸点の補充には改めて他日を期すよりない。

なお、煩雑を避けるため、目録に取めた資料については、表題のみ、または表題と目録の番号のみを示し、逐一の書誌の記載は省略した。

この目録に掲げた資料はすべて北海道立アイヌ民族文化研究センターで現物または複製を所蔵している。

2 江賀寅三関係文献目録

2-1 凡例

- ・目録は、資料の性格により次の2種類に分けた。

(4) 江賀のキリスト教入信のきっかけになったという辺泥五郎とのやりとりや、江賀自身による自分のアイヌ名の解釈が示されている点などである。

(5) 『エカシとフチ』編集委員会編『文献上のエカシとフチ』（札幌テレビ放送、1983年）では江賀について文献5点を挙げたとどまる。またアイヌ関係文献について現在もっとも網羅的な目録である『アイヌ文献目録 和文編』（みやま書房、1978年）、および『アイヌ年誌』（1987年版より刊行。1989年版までアイヌ年誌刊行会、1990・91年版以降アイヌ無形文化伝承保存会発行）によっても、本目録に掲げた文献の過半は収録されていない。

(6) 特にホーリネス教会関係資料には、江賀の独立伝道や同教会での伝道の様子を伝える資料が多い。静内新生教会の15周年記念誌（資料2-82）は、同教会設立前後の歴史を物語る記録を多く収めている。また分量は些少ながら、江賀の娘・其枝、後には江賀自身が姉茶尋常小学校の唱歌の授業に赴いたことを示す記事（資料2-42）は江賀繁子「亡き父の思い出〈樺太〜姉茶時代〉」（『アイヌ伝道者の生涯』226〜231頁）の内容を補強する。

(7) 例えば次のようなものである。

・向井山雄「江賀寅三君へ」（資料2-7）は、「北海タイムスならびに小樽北門新報紙上における」江賀の「意見」を受けて執筆されたものだが、その江賀の投稿は未確認である。

・『吉田巖日記』第13によれば吉田は江賀の「草稿」に「対する所感を原稿紙につづ」たものを「修正」し「論者に与ふ」と題して『北道』なる雑誌に寄稿している（1925年1月27日〜2月8日、および『吉田巖著作目録』による）が、掲載誌は未見である。

・井黒弥太郎の編集になる『アイヌ資料集』（北海道立図書館北方資料室所蔵）には、「眠れる民族の覚醒」と題した新聞記事のスクラップがあり、その中で長万部の「役場の吏員」をつとめる江賀が「和人に対しアイヌ本然の姿を見せよう」と「アイヌ一代記」を執筆中であり、「近く完成の見込み」との記述がある。この記事が江賀による自叙伝原稿執筆の模様が報じていることは明瞭であるが、このスクラップには紙名ならびに日付が記されておらず、現在までの調査でも確認できてはいない。

目録1 江賀寅三著作文献等目録 江賀寅三自身の執筆になるもの、または江賀寅三の執筆、談話等を編集、採録したもの。

目録2 江賀寅三関係文献目録（図書・雑誌等） 上記以外の江賀寅三関係の文献資料。

- ・目録には、編著者名、表題名、収録書名、関係頁（単行書の場合は本文の頁数、図書・雑誌の一部分の場合は関係する頁。前者についてはゴチック体で示した。）、発行所名を記した。
- ・配列は発行年月日順とした。未公刊資料等を後年になって刊行したものについても、公刊年月日に従った。
- ・「編著者名」は資料の記載に従った。筆名などで本名の特定ないし推定が可能なものは〔 〕内に示した。
- ・「表題」が特に付されていない文献、1点の文献の中で数カ所以上にわたって関係記述のある場合、および表題からでは内容の推測がつきにくい文献については、記事の摘要を〔 〕内に記した。記事の見出しなどの区切りは「/」で示した。
- ・「備考」には、その資料の摘要、再録の情報、活字化資料の原資料との対比、その他必要と考えた情報を掲載した。備考欄は各目録の末尾に設けた。
- ・プライバシーに触れる内容のある文献は目録から除外した。

2-2 目録

目録1 江賀寅三著作等文献目録

番号	年 月 日	編 著 者	表 題	所収(巻号)	頁	発 行 所
1	1911(明44).11.3	江賀寅三	長万部だより〔皇太子行啓の際の長万部での「奉迎」の模様などを伝える白井柳治郎宛て書簡〕	良友 17号		有珠虻田土人学校良友会
2	1917(大6).4.25	吉田 巖 (採録)	阿夷奴哀歌 Kuyainu yupo	阿夷奴研究 第一号	8-12	日本阿夷奴学会
3	1917(大6).7.25	吉田 巖 (採録)	アイヌの祈禱詞	アイヌ研究 第二号	第一年 11-15	日本アイヌ学会
4	1918(大7).5.15	吉田 巖 (採録)	アイヌ ウチャスクマ	アイヌ研究 第四号	79-81	日本アイヌ学会
5	1921(大10).5.20	江賀寅三	青年と学問	ウタリグス 1巻5号	26-27	アイヌ伝道団
6	1921(大10).9.29	江賀寅三	道の種	ウタリグス 1巻7号	23-25	アイヌ伝道団
7	1923(大12).1.18	江賀寅三	アイヌの兄弟の證/同族を思ふ真心より昔は教員今は伝道者	きよめの友 850号	5	聖書学院
8	1925(大14).6	江賀寅三	第一回あいぬ伝道通信		8	江賀寅三
9	1925(大14).10.1	江賀寅三	アイヌ伝道報告 第二号		4	江賀寅三

番号	年 月 日	編 著 者	表 題	所収(巻号)	頁	発行所
10	1925(大14).11.5	江賀寅三	アイヌ伝道の江賀兄よりの通信	きよめの友 979号	7-8	聖書学院
11	1925(大14).12	江賀寅三	アイヌ伝道報告 第三号		4	江賀寅三
12	1926(昭1).3.18	江賀寅三	アイヌ伝道通信	きよめの友 998号	5	聖書学院
13	1926(昭1).6	江賀寅三	アイヌ伝道報告 第四号		4	江賀寅三
14	1927(昭2).6.23	[江賀寅三]	[監督局報][江賀寅三からの伝道活動報告]	きよめの友 1064号	8	聖書学院
15	1927(昭2).9.29	[江賀寅三]	[監督局報][江賀寅三からの伝道活動報告]	きよめの友 1078号	8	聖書学院
16	1928(昭3).9.6	江賀寅三	アイヌ伝道巡行記	きよめの友 1127号	8	聖書学院
17	1929(昭4).5.16	[江賀寅三]	北海道江賀兄より	きよめの友 1163号	8	聖書学院
18	1930(昭5).1.1	江賀寅三	救はれ深められ癒されたアイヌ	天国新聞 43号	3	聖書学院
19	1931(昭6).5.28	江賀寅三	アイヌ伝道〔樺太伝道、エスコタン運動などの状況を報告〕	きよめの友 1269号	7-8	聖書学院
20	1931(昭6).10.8	江賀寅三	アイヌ族伝道報 多蘭泊から十和田まで	きよめの友 1288号	7	聖書学院
21	1932(昭7).5.19	江賀生(江賀寅三)	日高のウタリ巡回記	きよめの友 1320号	8	聖書学院
22	1932(昭7).7.7	江賀寅三	通知〔姉茶に転住の旨〕	きよめの友 1327号	8	聖書学院
23	1932(昭7).12.15	[江賀寅三]	北海道姉茶より(アイヌ伝道通信)〔献堂式挙行〕	きよめの友 1350号	7	聖書学院
24	1934(昭9).8.30	江賀寅三	アイヌの日高宣教	きよめの友 1439号	8	聖書学院
25	1937(昭12).7.29	(江賀寅三)	北海道に於ける各地の宣教／姉茶祈の家	きよめの友 1591号	8	きよめの友社
26	1937(昭12).10.21	(江賀寅三)	北海道各地の教勢／姉茶	きよめの友 1603号	8	きよめの友社
27	1938(昭13).3.10	(江賀寅三)	ウタリ伝道／江賀氏の健闘	きよめの友 1623号	8	きよめの友社
28	1939(昭14).3.1	吉田 巖	アイヌのさけび(江賀寅三君に聞く)	北海道社会事業号	82 26-29	北海道社会事業協会
29	1952(昭27).5.30	シアンレク(江賀寅三)	アイヌ教育史話(全22回連載)	日高教育情報	6号 ~28号	日高教育研究所
30	1957(昭32).11.3	吉田 巖(採録)	粟駒〔1910年に江賀寅三から採録した「昔話」〕	愛郷譚叢	116-117	帯広市教育委員会

番号	年 月 日	編 著 者	表 題	所収(巻号)	頁	発 行 所
31	1957(昭32).11.3	吉田 巖(採録)	人喰銀串〔1910年に江賀寅三から採録した「昔話」〕	愛郷譚叢	117-118	帯広市教育委員会
32	1960(昭35).7.1	江賀寅三	真のウタリー	北海道アイヌ協会静内支部同族会報 1号		北海道アイヌ協会静内支部
33	1960(昭35).7.10	江賀寅三	酒のうた	北海道ウタリー協会静内支部 会報2号		北海道ウタリー協会静内支部
34	1986(昭61).10.6	梅木孝昭(編)	アイヌ伝道者の生涯 江賀寅三遺稿		271	北海道出版企画センター
35	1996(平8).9	江賀寅三	虻田学園日誌	吉田巖資料集3(原資料編)	42	帯広市図書館
36	1996(平8).9	江賀寅三	虻田学園日誌	吉田巖資料集3	9-120	帯広市図書館

〈目録1 備考〉

1-1) 白井柳治郎「虻田の旧土人教育」(『北海道教育史 全道編3』北海道教育研究所、1963年)323頁に再録。また一部が岡村正吉「白井坂の碑に敬礼」『古武士の校長列伝』(北海道教育新報社、1971年)237頁に、『良友』17号が『近代民衆の記録 5 アイヌ』(新人物往来社、1972年)129~142頁に、それぞれ収録されている。

1-2、3、4) 『阿夷奴研究』(2号より『アイヌ研究』と改題)は復刻版(みやま書房、1972年)がある。

1-5) 筆者の確認した『ウタリグス』は27頁から30頁を欠いている。掲載頁は目次の記載による。

1-10) 『アイヌ伝道報告 第二号』(資料1-9)のうち「(四)通信」を転載したもの。

1-12) 『アイヌ伝道報告 第三号』(資料1-11)のうち「(四)通信」を転載したもの。

1-32、33)同会報はB4判1枚の謄写印刷である。1号の末尾には「皆様の御投稿をお待ちして居ります。毎月末まで江賀先生宅へお届け願います」とある。

目録2 江賀寅三関係文献目録

番号	年 月 日	編 著 者	表 題	所収(巻号)	頁	発 行 所
1	1918(大7).11.12、13		アイヌ出の先生/文学士以上の文才もある/酒も飲まないで刻苦勉強	北海タイムス	5	
2	1921(大10).3.20		本団第一回総会報告	ウタリグス 1巻3号	3	アイヌ伝道団
3	1921(大10).3.20	一記者	上下方記事	ウタリグス 1巻3号	19-20	アイヌ伝道団
4	1923(大12).8.9		[消息][江賀寅三新平賀へ]	きよめの友 879号	8	聖書学院
5	1924(大13).1.30		[消息][江賀寅三札幌へ出てパチェラーの「書記」に]	きよめの友 897号	8	聖書学院

番号	年月日	編著者	表題	所収(巻号)	頁	発行所
6	1924(大13). 7.17	中田生〔中田重治〕	北の夏より南の夏へ〔札幌にて江賀寅三に会い近況を聞く〕	きよめの友 911号	5-6	聖書学院
7	1924(大13). 9.25	名取唄一	アイヌ部落へ〔江賀の誘いにより新平賀を来訪〕	きよめの友 921号	7-8	聖書学院
8	1925(大14). 4.1	向井山雄	江賀寅造君へ	ウタリグス号 5巻4	8-10	アイヌ伝道団本部
9	1925(大14). 4.23	中田重治	アイヌ伝道〔江賀寅三の聖公会脱会と独立伝道従事等を報じる〕	きよめの友 951号	1	聖書学院
10	1925(大14). 4.23	米田生〔米田豊〕	ホーリネス大会略記〔江賀寅三「アイヌ服を纏」って演説〕	きよめの友 951号	7-8	聖書学院
11	1925(大14). 5.21	中田生〔中田重治〕	渡満の途すがら〔中田らの東京から九州までの「巡廻」記。江賀寅三同行〕	きよめの友 955号	7-8	聖書学院
12	1925(大14). 6.25		〔消息〕〔江賀寅三帰路に〕	きよめの友 960号	8	聖書学院
13	1925(大14). 7.2		人種無差別論 中田重治師の説教	きよめの友 961号	5-6	聖書学院
14	1925(大14). 7.2		〔消息〕〔江賀寅三新平賀に帰村〕	きよめの友 961号	8	聖書学院
15	1925(大14). 7.9	伊藤生	奥羽北部の旅〔盛岡で江賀が講演〕	きよめの友 962号	7-8	聖書学院
16	1925(大14). 8.6	中田生〔中田重治〕	北海道よりの帰路〔江賀寅三のもとを来訪〕	きよめの友 966号	6-7	聖書学院
17	1927(昭2). 4.28	米田生〔米田豊〕	ホリネス大会記(続)〔「宣教会」で江賀寅三が紹介され演説を行う〕	きよめの友 1056号	6-7	聖書学院
18	1927(昭2). 9.15	丹羽生	盛夏北上の旅(二)〔小樽の集会で江賀が演説〕	きよめの友 1076号	7-8	聖書学院
19	1928(昭3). 3.29		〔消息〕〔江賀寅三の伝道活動と旭川での鍋沢之(ママ、元か)蔵の応援〕	きよめの友 1104号	8	聖書学院
20	1928(昭3). 9.20	門屋	樺太天幕伝道報〔江賀寅三の樺太伝道活動に触れる〕	きよめの友 1129号	7	聖書学院
21	1928(昭3). 10.18		〔消息〕〔江賀寅三、旭川から樺太へ転住〕	きよめの友 1133号	8	聖書学院
22	1928(昭3). 10.18	吉津	北海道部会報〔北海道部会にて江賀が演説〕	きよめの友 1133号	7-8	聖書学院

番号	年月日	編著者	表題	所収(巻号)	頁	発行所
23	1928(昭3).11.1		土人の教化〔江賀寅三の活動を紹介〕	東京の青年 7巻11号		
24	1929(昭4).2.1		〔江賀福音使と中田監督〕の 写真掲載〕	天国新聞 32号	4	聖書学院
25	1929(昭4).3.14		〔消息〕〔江賀寅三のホーリネス大会参加等について〕	きよめの友 1154号	8	聖書学院
26	1931(昭6).5.14		ホーリネス大会〔宣教会〕で 江賀寅三演説〕	きよめの友 1267号	6-7	聖書学院
27	1932(昭7).6.23		〔消息〕〔江賀寅三、日高に〕	きよめの友 1325号	8	聖書学院
28	1932(昭7).6.23	中田生〔中田重治〕	北方急行伝道記(二)〔江賀寅三に日高への転住を話す〕	きよめの友 1325号	8	聖書学院
29	1932(昭7).6.30		〔消息〕〔江賀寅三、浦河に〕	きよめの友 1326号	8	聖書学院
30	1932(昭7).7.21		〔消息〕〔江賀寅三、集会所新築へ〕	きよめの友 1329号	8	聖書学院
31	1932(昭7).11.17		〔消息〕〔中田重治、姉茶の献堂式に出席するため出発〕	きよめの友 1346号	8	聖書学院
32	1932(昭7).12.1	中田生〔中田重治〕	献堂旅行	きよめの友 1348号	8	聖書学院
33	1933(昭8).7.13		伝道美談(八)アイス宣教師	きよめの友 1380号	8	聖書学院
34	1934(昭9).2.22		〔消息〕〔江賀寅三の消息〕	きよめの友 1412号	8	聖書学院
35	1934(昭9).5.10		〔消息〕〔静内赴任の近藤福音使、江賀寅三のもとから静内へ〕	きよめの友 1423号	8	聖書学院
36	1935(昭10).8.22		北海道夏期聖会報	きよめの友 1490号	7	聖書学院
37	1935(昭10).10		旧土人保護施設改善座談会記録	北海道社会事業 42 2-70号		北海道社会事業協会
38	1936(昭11).8.20		一粒の麦ノ江賀寅三福音使息女	きよめの友 1542号	10	きよめの友社
39	1936(昭11).11.12	下村太郎	姉茶教会訪問記	きよめの友 1554号	7	きよめの友社
40	1937(昭12).4.1		〔消息〕〔全国きよめ大会に江賀参集〕	きよめの友 1574号	8	きよめの友社
41	1937(昭12).6.17		文書伝道に良き契ノ結果心中を思い止った人等	きよめの友 1585号	7	きよめの友社
42	1937(昭12).7.8		〔おちば〕〔江賀寅三、其枝の死後彼女に代わって姉茶の小学校に唱歌の授業〕	きよめの友 1588号	7	きよめの友社

番号	年 月 日	編 著 者	表 題	所収(巻号)	頁	発 行 所
43	1940(昭15).4.20		ウタリー納税組合創立総会	小樽新聞	6	
44	1948(昭23).12.10		アイヌ人物紹介／江賀寅三君	北の光 創刊号	39	北海道アイヌ協会
45	1953(昭28).10.31	辻岡明信	アイヌ系特異児童の発生は和人の白眼視が原因	日高教育情報 23号	2-3	日高教育研究所
46	1955(昭30).9.15	村上久吉	小悪をも強く戒めあう江賀一家	あいぬ実話集	1-5	旭川市立郷土博物館
47	1959(昭34).11.3	奈良農夫也	〔吉田巖あて1923年6月29日消印書簡の中で江賀寅三に言及〕	愛郷往來	33	帯広市教育委員会
48	1960(昭35).12.25	吉田巖	生活と読書〔定期的に落手している刊行物を列挙する中に「天国新聞」を挙げる〕	愛郷春秋	73	帯広市教育委員会
49	1960(昭35).12.25	吉田巖	上田万年博士著「国語のため第二」をひもときて〔同書を読んだの「所感」を述べる中で江賀に言及〕	愛郷春秋	82-84	帯広市教育委員会
50	1960(昭35).12.25	山崎恒一	〔吉田巖あて1935年8月30日付け書簡。江賀寅三の近況に触れる〕	愛郷春秋	86	帯広市教育委員会
51	1964(昭39).2.15		キリスト教の愛の精神を伝える／特別番組「世の光」	北海道新聞	8	
52	1964(昭39).4.1	神山良雄	〔北から南から〕〔静内駅前で江賀との写真〕	百万人の福音号	152-39	いのちのこば社
53	1964(昭39).5.1	森山諭	アイヌ伝道秘話 コタンの勇士(全3回連載)	百万人の福音号	153号~155号	いのちのこば社
54	1964(昭39).5.31	吉田巖(小林正雄編註)	吉田巖年譜〔1924年と1939年の箇所に関係記事〕	吉田巖伝記資料	18、22	帯広市教育委員会
55	1964(昭39).7.1	森山諭	アイヌ教育家、牧師、江賀寅三伝 戦うコタンの勇者		277	日本イエス・キリスト教団東京教会出版部
56	1964(昭39).12.27		ウタリ(同胞)のために／伝道に半生かけた江賀さん／ある人生「われらウタリに」	北海道新聞		
57	1965(昭40).1.5	中村尚義	〔放送みてきいて〕「ある人生われら…」を見て	北海道新聞(夕刊)		
58	1965(昭40).4	青柳栄太郎	コタンの伝道者	文藝春秋1965年4月号		

番号	年 月 日	編 著 者	表 題	所収(巻号)	頁	発 行 所
59	1965(昭40). 4 . 1	森山論	[きょうも一日、 四月の聖句日課] 姉茶コタンの一夜	百万人の福音 号	164 49	いのちのことば社
60	1966(昭41). 2 . 25	比良信治	北海道の星 われらウタリに	ジュニア版NHKあ る人生 3	73-107	日本放送出版協会
61	1966(昭41). 7 . 26		昭和41年度北海道青少年健全育成推進功労者表彰〔表彰者中に江賀寅三〕			北海道
62	1966(昭41). 11. 15		アイヌ伝道のこと	十字架の言 23号	17-18	十字架の言社 (高橋三郎方)
63	1967(昭42). 2 . 15		江賀牧師のこと	十字架の言 26号	14-15	十字架の言社 (高橋三郎方)
64	1967(昭42). 7 . 15		江賀寅三先生のこと	十字架の言 31号	20	十字架の言社 (高橋三郎方)
65	1968(昭43). 2 . 19	菅原幸助	コタンの代書人	現代のアイヌ	153- 161	現文社
66	1968(昭43). 4 . 19		アイヌ人牧師に春／教会ついに完成／静内／ただうれし涙…献堂式	北海道新聞(胆振日高版)		
67	1968(昭43). 5 . 15		マルチン・ルーサー・キング牧師の戦い	十字架の言 41号	1-6	十字架の言社 (高橋三郎方)
68	1968(昭43). 7	北海道総務部知事室道民課(編)	江賀寅三	北海道開発功労者の声—録音目録	21	北海道
69	1968(昭43). 7 . 1		叫び続けた“差別廃止”／急死のアイヌ牧師・江賀寅三さん／伝道に生涯ささげる	北海道新聞(胆振日高版)		
70	1968(昭43). 7 . 15		噫ますらおは倒れた	十字架の言 43号	16-17	十字架の言社 (高橋三郎方)
71	1972(昭47). 3 . 30	山崎恒一	[1912年2月27日付け吉田巖あて書簡。山崎の家に寄宿し勉学を積んでいる江賀の近況に触れる]	書簡自叙伝	60-61	帯広市教育委員会
72	1972(昭47). 3 . 30	山崎恒一	[1912年7月31日付け吉田巖あて書簡。上と同じく江賀の近況に触れる]	書簡自叙伝	61-62	帯広市教育委員会
73	1972(昭47). 3 . 30	山崎恒一	[1912年8月15日付け消印の吉田巖あて書簡。上と同じく江賀の近況に触れる]	書簡自叙伝	62-63	帯広市教育委員会
74	1975(昭50). 7 . 31	静内町史編さん委員会(編)	旧土人学校	静内町史	965- 968	静内町

番号	年月日	編著者	表題	所収(巻号)	頁	発行所
75	1976(昭51).7.20	高橋三郎	戦うコタンの勇者 アイヌ伝道に生涯を捧げた江賀寅三牧師	地の塩となった人々 わが師・わが友	189-202	教文社
76	1981(昭56).8.20	藤本英夫	江賀寅三	北海道大百科辞典 上巻	199-200	北海道新聞社
77	1982(昭57).7.15	福島恒雄	江賀寅三〔第5章「アイヌ民族への伝道と働き」七「パチエラー先生とその弟子たち」〕/ホーリネス教会〔第8章「樺太キリスト教略史」二「各派の伝道」〕	北海道キリスト教史	318-319/471-473	日本基督教団出版局
78	1982(昭57).12.30	吉田 巖	吉田巖日記 第五〔1910年4月5日、江賀の虻田学園到着から、翌年2月までの日記に江賀の記述頻出〕		107-162	帯広市教育委員会
79	1983(昭58).2.10	松田ノブ子	江賀寅三さんの思い出	エカシとフチ	361-364	札幌テレビ放送
80	1983(昭58).4.1		姉茶ホーリネス教会	萩伏百年史	469	萩伏開基百周年協賛会
81	1983(昭58).12.24	15周年記念誌編集委員会	15周年記念誌		41	静内新生教会
82	1984(昭59).10.30	河野常吉	向井山雄氏の談〔江賀寅三の消息に触れる〕/長万部村アイヌ〔江賀寅三を紹介〕	アイヌ聞取書	137、156	北海道出版企画センター
83	1985(昭60).7.27	福島恒雄	差別なき教育のために 江賀寅三の祈り	教育の森で折った人々 北海道キリスト教育小史	119-124	北海道キリスト教書店 聖文社
84	1986(昭61).10.6	川上勇治	序にかえて	アイヌ伝道者の生涯	3-8	北海道出版企画センター
85	1986(昭61).10.6	野村義一	序文	アイヌ伝道者の生涯	1-2	北海道出版企画センター
86	1987(昭62).2.14	吉田 巖	吉田巖日記 第九〔1917年11月8、12日の日記に江賀に関する記述〕		77、78	帯広市教育委員会
87	1987(昭62).7.15	佐々木鉄夫	キリスト者として異彩を放つ存在/正当な分析と評価のための貴重な資料〔「アイヌ伝道者の生涯」書評〕	読書北海道	106号 2	
88	1987(昭62).9.29	梅木孝昭	〔文化ジャーナル〕江賀寅三の業	北海道新聞(夕刊) 小牧版)		

番号	年 月 日	編 著 者	表 題	所収(巻号)	頁	発 行 所
89	1987(昭62). 12.9~1988.2.10	梅木孝昭	江賀寅三の周辺〔41回連載〕	北海道新聞(夕刊苦 小牧版)		
90	1988(昭63). 1.30	吉田 巖	吉田巖日記 第十〔1918年5 月28日の日記に江賀の遠仏計 報を知った記述、11月14日の 日記に資料2-1の新聞記事 に対する感想を「物足らぬ、 一向にえきらぬ」等と記す〕		12,47	帯広市教育委員 会
91	1988(昭63). 2.20	森山 論	江賀寅三	日本キリスト教歴史 大事典	189	教文館
92	1990(平2). 1.31	吉田 巖	吉田巖日記 第十二〔1921年 4月28日の日記に江賀からの 葉書により遠仏廃校を知った との記述〕		38	帯広市教育委員 会
93	1991(平3). 2.25	吉田 巖	吉田巖日記 第十三〔1924年 11月から翌年2月にかけての 日記に江賀の聖公会伝道者と しての帯広赴任から離任まで の記述などを散見できる〕		118- 132	帯広市教育委員 会
94	1992(平4). 5.15	荒井源次郎(遺稿、 加藤好男編)	江賀寅三	荒井源次郎遺稿アイ ヌ人物伝	68-69	加藤好男
95	1994(平6). 12.15	矢野恭弘	静内訪問二十七年を振り返っ て	十字架の言 30巻12 号	16-21	十字架の言社 (高橋三郎方)
96	1995(平7). 8.1	鳩沢佐美夫	(鳩沢佐美夫)日記	沙流川 鳩沢佐美夫 遺稿	245,26 9-270	草風館
97	1996(平8). 3.27	小川正人	「北海道旧土人保護法」旧土 人児童教育規定」下のアイヌ 教員—江賀寅三と武隈徳三郎 を中心に	北海道立アイヌ民族 文化研究センター研 究紀要 2号		北海道立アイヌ 民族文化研究セ ンター
98	1996(平8). 3.31	静内町史編さん委 員会(編)	遠仏尋常小学校	増補改訂静内町史下 巻	347- 349	静内町

〈目録2 備考〉

2-23) 梅木孝昭氏保管のスクラップを確認できたのみで原誌は未見である。

2-48) 1939年9月2日付の文章。吉田は「江賀寅三君より10年以上も寄贈を受けているので感謝してよむ。だが我が気性にはあはぬ」と記している。吉田『とちあいにぬ研究』(帯広市教育委員会、1970年)53頁にもほぼ同じ内容の文章を収録している。

2-49) 1939年2月12日付の文章。上田の「労働者」と「文学」との関わりに関する議論に触発されて次のように記している。「アイヌの先覚者ウタリにあてはめて見る時に尤も痛切に懇切に尤も痛切に懇切にシツクリと合致するかに考へられる。昨今アイヌ先覚者の一人江賀寅三君に向って、余はつとにその執筆物を通じてウタリの手のとどかぬ点をよく世に訴へ且つ相談相手となって和人对ウタリの調和役に立ってもらふべく目下その実現に向って奔走中である。」

2-50) 吉田巖『書簡自叙伝』63頁に再録。

2-54) 確認できた関係記述は次の3箇所である。特に後2者は江賀の自伝刊行計画の進捗を伝える点で重要である。江賀は『アイヌ伝道者の生涯』の下敷きになったノートを江賀は、半年たらずで書き上げた可能性があり、だとするとノートの分量からすれば相当な勢いだったことになる。1924年11月11日「教弟江賀寅三君来泊」(後述の吉田巖日記参照)、1939年1月30日「杉岡孝之君よりアイヌ著作の件来状」、同年6月20日「教弟江賀寅三君より著作原稿受付」
2-61) 表彰式当日に配布された式のしおりである。

2-3 主要資料解題

〈目録1〉

・『アイヌ教育史話』(資料1-29) 公刊された江賀の自叙伝として最初のものである。連載第一回を掲載した『日高教育情報』の「編集後記」によれば、この連載はかねてから江賀を知る編者の意向によるものである。内容は『アイヌ伝道者の生涯』と共通する部分が多く、おそらく後述する自叙伝の原稿のノートを手もとにおいて執筆したのだろう。一方で、「アイヌ」の語義に関する自説の披瀝、自らの教育史観の提示、「史話」にとどまらない時論の主張などに特色がある。

筆者は日高教育研究所所蔵の原本により悉皆調査を行ったが、公共図書館では前掲『アイヌ資料』中にスクラップがある(ただし1回分欠、欠号分はウタリ総合センター所蔵資料などで補うことが可能である)。

・『戦うコタンの勇者 アイヌ教育家・牧師・江賀寅三伝』(資料2-55) これも後述する江賀の自叙伝の原稿ノートを下敷きにしているが、二、三章の歴史の概説は著者による学習の反映であり、またノートには含まれていない伝記的記述は、おそらく著者が親しく江賀から聞き書きしたものであろう。

同書刊行の経緯については同書「序」によれば、江賀の伝道活動に共鳴し活動を共にするようになった森山が、「江賀寅三自叙伝刊行後援会」による自叙伝刊行事業に関わり執筆するに至ったものとのことである。同会については、1962年12月付けの「趣意書」⁽⁸⁾には会長堀井出香、「顧問」に中田羽後(中田重治の子)、吉田巖ら24名、「賛助」として鍋沢元蔵ら27名、計52名の名が記されている。

・『アイヌ伝道者の生涯』(資料1-34) 編者の梅木孝昭が「発刊に寄せて」に記したように、同書は吉田巖の勧めによって江賀が執筆した自叙伝のノート数冊をもとにしている。ただ、吉田巖自身による年譜によれば、1939年6月20日に「教弟江賀寅三君より著作原稿受付」と記録がある(資料2-54)ので、原稿そのものは吉田巖が受け取っており、江賀のもとに残っていたノートはその下書きに相当するのではないかと推測する。

全てのノートを確認できてはいないけれども、管見の範囲では、ノートは同じ内容のものが複数あり、江賀が何回か下書きを重ねた跡を示すものと推測する。一つのノートの中でも、多くの

(8) 折り畳み1枚、縦20cm×横34cm、森山の著書では「江賀寅三自叙伝刊行会」とあるが、この資料では「江賀寅三自叙伝刊行後援会」となっている。(梅木孝昭氏保管資料による)。

箇所では赤、青の鉛筆により幾度も加筆・訂正を行っている。

ノートの記録は当然ながら1939年当時までであり、これは同書の244頁までに相当する。本文の随所に小さな活字で挿入されている解説文と245頁以降の本文とは編者の梅木氏によるものである。このほか同書は、多くの関係資料と、同書刊行にさいして、江賀の関係者が寄せた文章を収録している。後者については同書の目次に記してあるのでここでは割愛し、前者を列挙すれば次のとおりである。

- ・『休業中の日誌』(52～58頁)：浦河の准教員養成所に学んでいたときの冬期休業中の日誌である。原資料は和紙に墨書されている。
- ・『陳情書』(66～69頁)：新平賀の平賀サンロカほかによる、江賀寅三の新平賀尋常小学校再赴任を陳情したもの。原資料は和紙に墨書である。
- ・『旧土人児童教育規程廃止ニ関スル意見書』(118～124頁)：江賀のもとに残されていた「控」を活字化したものである。
- ・『独立伝道報告書』(132～139頁)：資料1-8、9、11、13のうち通信本文のみを収めている。通信にはこのほかに江賀の伝道活動に金品を寄付した人々の名前と金額等が記されており、江賀の伝道の基盤の広がりやうかがわせる資料になっている。
- ・『北海道土人の教化』(資料2-23：162～163頁)

なお同書には、ここに挙げた以外にも資料からの引用がある(105～107頁の「陳述書」など)が、それらはノートに直接記されているもので、江賀が資料(あるいはその写し)から転写したか、自身の記憶によって記したものと推測する。

〈目録2〉

・『ウタリグス』 ジョン・パチェラーのもとで聖公会の伝道に携わったアイヌによる「アイヌ伝道団」の発行になる雑誌である。3,5,7,8,9号および5巻4号のみ所在と内容の確認ができた。

中でも向井山雄「江賀寅造〔マ〕君へ」は、向井と江賀の見解の相違がうかがえて興味深い。後年同じアイヌ伝道団が発行した雑誌に『ウタリ之友』があるが、この時既に江賀はホーリネス教会の宣教使として活動していたからであろう、管見の限り同誌の中には江賀の論考はない。

・『きよめの友』『天国新聞』 前者は中田重治らの創建になる東洋宣教会ホーリネス教会の機関紙で1899年創刊の『焰の舌』を前身とし(改題は1917年)、A4判、目録に収めた時期のものは週刊で毎号ほぼ8面だてである。後者は同教会の宣教活動用の出版物で1926年創刊、A4判、月刊で毎号4頁だてである。江賀の聖書学院入学の経緯は『アイヌ伝道者の生涯』などに略述がある。同教会は、ちょうど江賀の入学する1920年代から、アイヌのほかにもマオリら先住民族や当時の日本植民地下の諸地域の出身者を聖書学院に入学させており、これらの民族、地域などへの伝道を自らの教派の特長として掲げている⁽⁹⁾。

(9) 『きよめの友』929号(1924年11月20日)1面の「マオリ族の基督者を送る」なる文章や、『天国新聞』57号(1931年3月)1面に「台湾の⁽²⁷⁾聖蕃、中華広東人、台湾人、アイヌ人、英国人、朝鮮人〔中略〕日本人」の「今聖書学院に居る十の人種」10名の写真を掲げたことなどはその姿勢の現れである。

二つの機関誌の記事には、その内容を大別すれば江賀の意識や活動を伝える江賀の伝道通信や信仰告白等、中田重治ら教会関係者による江賀あるいはアイヌ民族に関する論説等、「消息」欄や同教会関係者の紀行文に紹介される江賀らの動向、がある。それぞれに資料的な意義があるが、ここでは、三つ目に挙げた「消息」欄などの持つ情報量を特記しておきたい。江賀の各地での講演の様子の一端を伝える記事(資料2-15など)、あるいは江賀とは直接に関係はないものの近代アイヌ史上での著名人の動向がかいま見える記事⁽¹⁰⁾などは、既往の文献を補強する情報として意義がある。他方、こうした機関紙では完結に記されている伝道の実相を、『アイヌ伝道者の生涯』などの記述が伝えていることも多い。なお、『きよめの友』には毎年4~5月頃に全国の教会の伝道者の任命記事および教会の所在地とを一覧表にした記事が載っており、江賀が新平賀に赴任して以降1938年までは江賀の名前を確認することができるけれども、逐一を目録に掲載することは省略した。

『きよめの友』は日本図書センター発行のマイクロフィルム『近代日本キリスト教新聞集成』に収録されている。今回筆者は、東京聖書学院所蔵の原本により、江賀が聖書学院に入学した1923年頃から、江賀が長万部に転居する1938年当時までの号について悉皆調査を行った。

同教会ならびにその機関誌については『日本キリスト教歴史大事典』(教文館、1988年)、二十周年記念運動出版委員会編『日本ホーリネス教団史』(日本ホーリネス教団、1970年)などによった。

・『十字架の言』 無教会主義のもと聖書の学習などの活動を続ける高橋三郎が主催する高橋三郎聖書研究会の月刊の通信誌である。江賀の伝道を支援した渡辺シゲからの来信によって江賀のことを知った高橋が江賀に関する記事を集中して同誌に掲載(資料2-69、70、71)、以後、同研究会の中から毎年、夏期に静内で子供会を催す人々も現れた(資料2-87等参照)。今回は渡辺シゲさんならびに同会の御厚意により関係号の情報を御教示いただき調査を行なった。

・『吉田巖日記』 吉田巖は虻田学園時代に江賀を教え、その後長く手紙などを通じての交わりが続いた。日記は、帯広市立図書館に寄託されており、現在1932年までの分が公刊されている。ただし公刊に際してはプライバシーに抵触する部分などを割愛しており、特に1916年は1年分の全文の公刊を見合わせている。

3 資料紹介

3-1 凡例

・録音資料について

(10) 中田生〔中田重治〕「北方急行伝道記(一)」『きよめの友』1324号、1932年6月16日、は中田が平賀徳太郎(江賀寅三の義弟。聖書学院に学んだ。『アイヌ伝道者の生涯』144~149頁参照)と同行して北海道を訪れた記録であるが、その中に「駅員をして居らるゝ同兄〔平賀〕の義弟森竹君は教員見送ってくれたが、アイヌ救済に関して互に意見を交換する事が出来た」という記述がある。この頃駅員をつとめていた「森竹君」はおそらく『原始林』(1937年)などの著作で知られる森竹竹市であろう。

- ・相手の話を聞きながらの「ええ」「はい」などの相づちは原則として省略した。
- ・人名、地名の文字については『アイヌ伝道者の生涯』や自叙伝ノートなどを参照した。
- ・聞き取りに疑問や不明部分の残る箇所には「〔?〕」を付した。
- ・年譜について
- ・出典については、前項と同じもの、および本稿で言及したものについて記載を省略し、今回新たに加えた情報についてのみ括弧内に記載した。

3-1 「北海道開発功労者の声」 江賀寅三

1996（昭和41）年9月19日録音

収録場所：静内町役場

聞き手：成沢光⁽¹¹⁾

テープ所蔵：北海道立文書館（マスターテープ）、北海道立図書館（複製）

本稿は北海道立図書館所蔵資料によった。

（成沢）：お生まれは、どちらでいらっしゃいましたね。

（江賀）：長万部、胆振の国の長万部です、はい。

（成沢）：そして、過去に私、うかがったような気がするんですけども、江賀先生は婿さんかなんか知らんけどもお名前が途中で変わったんだということ聞いたことありますが、そういう点は、いかがなものでした？

（江賀）：わしの父親はね、吉良寅八って言ってね、アイヌはキラランデ⁽¹²⁾というんです。そういう家で三番目に生まれた寅三、吉良寅八の三番目で寅三とつけ寅三^{ぞう}となったんですよ。

その近所に江賀洪二郎という、親戚のじいさんがいたの。独り者のじいさんで、相続人がないものですからそこへ養子にやられたんです私。江賀洪二郎、エカシプミというエカシですね。そこへ貰われていったので、江賀という姓を名乗るようになったんです。もともと私はその、アイヌには名前二つある、い

わゆる、親が本当に付けた、神様に届いている名前と、戸籍の名前と、こう二つあるんですよ。で、戸籍のほうは江賀寅三ですけども、生まれるとすぐ、神様にその、感謝の祈りを捧げるんですね。この子供が生まれたと、こういう名前を付けましたから、というふうに、父が祈って下さるんですね。それで、シアンレツという名前を付けてもらったんですね。

私はクリスチャンになってはじめて、そのシアンレツという名前の意味がわかったんですけどね、「シ」というのは「まこと」、「アン」というのは「ある」、それから「レツ」で「叫ぶ」、「まこと・ある・叫ぶ」すなわち「真理を叫ぶ者」という意味の名前付けてもらったということですね。私の父親もなんていうすばらしい名前を付けてくださったんだろうといま感謝していますよ、はい。

（成沢）：お名前どおりご立派でいらっしゃいますが、（江賀：なにを言ってるんですか（笑））そこで、その後の先生の学校時代とかね、今日のこの伝道生活に入られた点を、お

(11) 成沢と江賀との関わりについては、『アイヌ伝道者の生涯』152頁参照。

(12) 『アイヌ伝道者の生涯』などでは「クリキン」と記している。

うかがいたいんですけども。

(江賀)：はい、少年時代というか幼年時代と
いいますかね、学校、三年生の秋であったと
思いますかね、私、二つほど年上の友達が、
訪ねてきて、トウキビ食べたいがトウキビ取
りに行こうっていうわけ。うちのトウキビ畑
約一里ほど奥なんです、それでまあ、食べ
たいんだから取りに行こうって二人でまあ、
コダシ⁽¹³⁾をしょって行ったのさ。ところが、
行く途中で雨がどしゃぶりになったんでね
え、止むまで、行くの、ちょっとゆるくない
ですね。ところが友達に「おいおい、ここに
トウキビこんなにあるからここでとっていこ
うよ」って、「そうだな」ってわけで、養成し
たの。悪い事に養成して、トウキビ十本ぐら
いずつ取って、コダシでしょってきたんです。
そしたら父親が「えらい早いんでないか」と、
早いのちゃんとわかるんですね。一里もある
ところへ行けばなんぼおそくても二時間はかかる
筈なのに、それがもう三十分ぐらいで来てる
んだから、これは確かに悪いことしてきたと
いうこと知った父はね、もう、非常にこの、
厳しく責めるんですね、とうとう白状しまし
た。ところがそれ「しょえ」と言われてそれ
しょわせられてね、そのトウキビ畑の主^{ぬし}に[の
ところに]連れられて、父は本当に涙をもっ
て謝って下すったんですね。そのことが今で
もその、私の心の中にこびりついているん
です。ええ。父というのは、まあ……本
当に優しい父ではあったけれどその時だけは、
厳しく私ども^{ぼく}責めました。そして、その、謝
りに行ったときも、ほんとに、自分でも悪い
ことしたようにして謝ってくださったんです

ね。そういうようなことがありまして、私は、
もう、伝道生涯に入るときまでそのことをも
う、心から離れません。

(成沢)：〔昭和〕39年の6月の、お出しにな
った、『戦うコタンの勇者』っていうご本を、
見していただきました。題が出てるんですが、
この、教会に、今の、仇うちを止められて、
そして、伝道者の生活に、お入んになったとい
うその、順序等をですね、少し、聞かせてい
ただきたと思うんですが。

(江賀)：うーん、教育者としては、大正2年
の、4月からですね、大正10年の5月まで。
一番最初には、門別の、新平賀っていう土人
学校、その次は、平取の、土人学校、その次、
最後にこの静内の、遠仏小学校に来たんです。
みんな土人学校を受け持って、同族の教育と
いうようなふうにしてやってきたんですね。

(成沢)：その、教育者としての期間に、ずい
ぶんご苦労な点多々あられたと思うんです
よね。(江賀)：うん、ええ、ええ、そりゃまあ
なんせ「戦い」だから(笑い)

(江賀)：なんせその、自分がね、なんていう
か、先入観ていいますかね、シャモに対する
その反感ていうのの前にあつたんですからね、
教育の点にもそれが表れてくるわけなんです
ね。まことにあい済まなかったけど。

学校の先生になって、大正6年の、1月の
10日の晩ですね、田舎の学校の先生っていう
のは一番偉いもんですからね、どっかの、何
かのお祝い事があるときは必ず、呼ばれるん
です。そして、ご馳走になるんです。その
晩にも、大したよばれて、帰る途中に、教
え子の家^{うち}ありましてね、その教え子のとこへ

(13) 小物入れの籠、海藻入れの袋。

「おい、どうした、居たか」って入ったところが、見知らないところの紳士がいたんですよ、その紳士がいたってその、懐かしそうに「ああ、先生、入れ入れ」って言うもんで、とうとう、そこへ入りました。そしたらもう、いの一ばんに、「あんたは学校の先生ですね」って。「うん、そうだ」と。「あなたは、生徒に酒を飲むことを教えているんですか」って、こう言うの。「馬鹿言うない。なに言ってるのよ」。ところが、「だってあんた、実地教育しているんでないのかい？朝から晩まで、しかも大きい生徒、酔ったの五人も連れて歩いて、酒飲んで歩くって言うことは、実地教育しているようなもんでしょ。」「いや冗談でない。」「アイヌは何で滅びているかわかるか」「いや」——知ってるとも言えないですね、だから頭かいてたら、「酒で滅びてるっていうこと、間違いないんでしょ。貴方が自分の同族を教育するのに酒をもってするっていうことは間違いでないのかい」と。もう、一本参ったんですね。

それから「いったいあんたは学校の先生になるのは何の目的でなったんだ」と言うから、「私はシャモに仇うちをする積もりなんだ」と、大きな顔して言ったんですね。^{にっぽん}「日本の教育は〔？〕」ってもそうだ、歴史であっても何でもそうだ。アイヌは丸きり国賊のようにして書いてある。そいで教えるようにしている。だからもう、生徒はなおさら、先生はそういう気持ちだから、おそらくみんなが、シャモって言うものはアイヌを軽蔑してる。アイヌをしてやっつけてしまえっていうような考え持ってるだろう。それがやっぱり、それに対

して敵対、もう敵愾心を持ってると。反感を持ってきて今日まで来てる。何とかしてウタリを、同族を救うためには、もう少し読み書きが出来るようにする、そういうふうにしななければならないと思うんだ。酒のことちょっと言えないんですね、恥ずかしいもんだから。そしたら、「あんたは同じ日本人でありながらね、シャモとアイヌと区別してですね、シャモに対して敵愾心持つっていうことは、誠にそれは間違いでしょう」と。「これ、こういう、本、あんた見たことあるか、これご覧なさい」と言って今言う聖書ですね、聖書私に見せて、一番先に書いてあるの見せて、「これご覧なさい」と。「はじめに神天地を造り給へり」とこう書いてあるんですね。「これあなたどういふふうに考える。この天地というか世界というものは自然にできたと思うか。そうでないでしょう。神様が天地を創造したもうた。その中にみんなを造りたもうた。この人間の先祖というのは誰であるか」と、「ここ読んでみる、この通りアダムとイブだ」と。二人の男と女だ、それが今、増えて増えて、世界中——その時はちょうど25万⁷って言っとった。今それから30年このかた、35万になつとる、35億になつてるんですね。人間の数は。そのときは25億であったんです——「この通り増えてるのを、もとただすとたった二人の人間だそうなんだ、いわば世界中の人々がまあ、兄弟でないのか」と。「ことに、明治天皇の、御歌に、こういうことあるでしょう」と。「よもの海みなはらからと思ふ世になど波風の立ちさわぐらむ」⁽¹⁴⁾と。その、日露戦争の時でありましたか、明治大帝の御製があったんです。「あな

(14) 明治天皇の1904年の「御製」である。表記は『明治天皇御集』（宮内省蔵版、岩波文庫、1943年）を参照した。

たはそれを何と子どもらに教えているか」と、こう聞かれたんです。〔?〕の教育してたということもはっきりしてますね、私は、はい。ほんとに、明治天皇は、世界の人々みな兄弟である、なぜそういうなのに兄弟喧嘩をするんだらうという、ご軫念のあまり、ああした御製が出たんだぞ、ということになって、もう、それでもう一本参ったわけですね。

そんなようなわけで、同じ兄弟であるところの、シャモもアイヌも、その人々を、あい憎むなんていうことは誠に、精神的において、殺人罪を犯していることなんだよという、それで一つ参ったんです、はい。

そういうようなわけで、とうとう、なんぼ私が、こう言ってたってあ言ってたって、駄目です。みんな聖書によって、聖書のお言葉によって、私は、もう、一つ一つ降参するように出来ていたんですね。その晩のうちに私はその先生と、——その先生はいわゆる、ジョン・バチラー先生の一のお弟子であったんです。辺泥和郎⁽¹⁵⁾という先生でした。その晩のうちに私の家にも行ってもらって、私の家族、家族って家の家内と二人です。家内にも話したところ家内が一番喜んでくれた。うちの父さんはクリスチャンになってくれるかと、誠に幸せだと。本当に喜んで、喜ぶ前に、私先に、妻の前に両手をついて謝ったんですね、ええ。今日まで、誠に、済まなかった、って。誠に苦勞をかけました、って謝った。それから、二人で、夫婦揃って、その晩のうちにク〔キ〕リスト信ずるという信仰を持ったのです。そういうようなわけで、それは大正六年の一月十日であった。その年の二月の十一日、

昔の紀元節とを〔?〕した、ジョン・バチラー先生から洗礼を受けたのであります。そんなようなわけなんです、はい。

いわゆる、頭の教育というものは、どれだけ出来ても、駄目なもんだなと思ったんですね、はい。やっぱし、本当の教育というのは、魂の教育でなければ、心の教育でなければならぬということ、そこに気づいたんです。決して頭の教育を否定するわけでもないですよ。いわゆるその頭の教育に心の教育というもの、を、そわせてはじめて車の両輪のごとくですね、そうするとそれがほんとに人間ができる。いわゆる人のため、お国のためにも、なるものが出来るんだということがわかったんです。

それから私は、とうとうこの、学校の教育を退いて、それで、ジョン・バチラー先生の、まあ鞆持ちになったわけなんです。そういうようなわけです、はい。

そして、聖書学園で勉強させてもらった。いわゆる伝道者としての資格をもらうようにしてもらったんですね。そんなようなわけなんです。

それから、昭和三年四月ですね、東洋宣教会の福音使という牧師でなく福音ですね、福音使という、なんて言いますか、名目をもらって、それから旭川派遣ということになったんです。で、この旭川の伝道のときに本当にお世話になったのは、第一に、いの一に貴方ですね。(成沢：いやいや) 本当にしてくだすったんです、なにも、それこそ、お世辞じゃないんですよ、本当のことなんだから。教会の会計は全部、成沢^{きょうだい}兄妹がやってくれた

(15) これは誤りで、このとき江賀に語った伝道者は辺泥五郎である。

ということはもう、いつたっても、50年、40年たった今日であっても、とても感謝しています。貴方の、応援が、力があったということは、本当に忘れません。あの時のまあ、約半年ぐらいの伝道でありましたけれども、かしこでは、いい働きをしたのではないけど、本当に神様の恵みによって、実むすんだ兄弟がいるんですね。今野さんとか、白石姉妹とか、岡田姉妹、というなふうにありますね。それから、一番私を手こずらした、井上さんは、今は立派に信仰生活してる、しかも北大も、助教授としてやってらっしゃる。

それから、樺太、旭川からすぐ、あれは10月でした。樺太伝統へところ、転入を命ぜられましたです。

で、樺太へ渡って第一の印象と言うのは、いわゆるその、監獄太郎にぶつかったことなんです。その晩に、ようやく向こうへ着いた晩に、暴れこんで来たのは監獄太郎です。

「本当にお前はキリストの弟子か、ほんとにお前はキリストの弟子か、俺を救うことができるか。俺は人殺しなんだ。俺のようなもの悪たれでも、救うことができるか」いうようなふうにしてもう、とうとう一晩中、ちょうどそのとき私髭のばしておったんですね、その髭を、もう、手からんでぐるぐるぐるぐるおもちゃにしてですね、私おもちゃになって一晩中、お相手させてもらったんですけど、とうとう彼は夜明けると同時に、恥も覚めたか知らん、悪魔のやつは出てしまった。彼は悔い改めてね、真剣になった。まじめな人間になった。しかも、北海道まで私と一緒に来て、証しに出てきました。まことに、いい、キリストのしもべとしてのご奉仕をして下さったんですね。

(成沢)：もう少し樺太時代のことを、こう、お聞かせ願えば、私は誠に結構だと思うんですがね。

(江賀)：はい、いっぱいありますよ。

あの、樺太へ渡ってから、私は、多蘭泊、西海岸の多蘭泊ということへ任命されて、多蘭泊には、五十戸がアイヌ、五十戸がシャモというような、いわゆる百戸の部落なんです。そこで〔へ〕任命されたんですが、そこであの、第一番にそこで天幕伝道やったんですね。一週間ほど。その時にまあその部落こぞってみんなその、信仰に入るというような早い話がリバイバル〔信仰復興〕みたいなもんだったんだね。それであの、中田監督は、お前そこへ行けてってやってくれたんです。ところがその、本気で伝道に行ったところが——まえのが嘘〔だというわけ〕ではなかったでしょうけど——本気で行ったところが誰も来ないってわけだ(苦笑)。誰も来ないで、今言うその、安川、監獄太郎ですね、そういう暴れんぼうが出てきたわけだ。とうとうその兄弟が救われた。安川松太郎という兄弟なんですが、ほんとに、イエス様のしもべとして証をたてた。そのうちにその、多蘭泊から西のほうには真岡という大きな町がある。東の方には本斗という町があったんです。その両方へ、月に一回ずつ私、巡回伝道にまわっていたんですね。

そしたら、本斗の町参りましたら、ちょうど、前に信者の家があります、その家で家庭集会していたんですね。伝道集会してたんです。そしたら、十人ばかりの兄弟姉妹が集まっておる。集会してるんですね。障子、壁紙一枚へだてて、向こうの座敷に一人がおって、大きな声で笑ってる声があびあび聞こえ

たんですね。ところがすぐにその一人が手をたたいたわけだ。「なんだヤソ教というものはアイヌの宗教だの。牧師もアイヌだし信者もみんなアイヌでないか」って言って笑ってるんです。手たたいて笑ってるんです。それがとうとう、その次の集会に行ったときは、とうとうその兄弟は悔い改めてね、「ああ私はほんとに、悪い者です。私は小樽におりまして、小樽から札幌までも、魚売りに行くんだが、まあ、なんていいますか、いわゆる薩摩守をがんばったんだ。無銭でもって、無賃でもって約一年間も毎日往復してた。おしまいに魚の売上金を集めてそれをみな懐にしてこんど樺太へ渡ってきたんだ」と。そしてこの大きなばくち打ちの団体に加わってある日とうとう、大泊から豊原、真岡、ところひとまわりしてとうとうこの本斗へ来たときにここで押さえられたと。キリスト様に押さえ、とらえられたんだと言って白状しましたね、ええ。そんな兄弟がありました。この兄弟は、まあ、ばくち打ち名人であったんだね。それがとうとう、裸一貫になったときにはじめて、キリストにとらえられた。彼はかえったわけですね。自分の、今度は正業に就いた。いわゆる鮮魚の加工を始める。たいした仕事をされましてね。自分の住宅も工場も開放して集会所にしてくれましたねえ。よく集会したもんです。

その兄弟も、樺太における間、ほとんど三年間四年間五年間のあいだ、おそらくその兄弟ひとりでもって私の会計を持ってくださったようなもんでしたよ。まことに、悪いものも、どんな悪いっていうようなものでも、いい方に使えば、いいこともあるんですね。悪いところに使う金も、いいところに使えばいいこ

とになるってこと、よく中田先生はそうおっしゃってる。その通りです。

もう一つですね、多蘭泊の教会での、問題で、敷地問題でもって、広地の村長のところへ訪ねていったことあるんですよ。そしたら話のついでにね、「何？キリスト教は偶像を拝まないで偶像を拝むって言うこと〔を〕罪だって？何言うんだ」と、「俺は警察官だよ、日本でも三種の神器は剣でしょう。剣をやはり、拜んでるんでないか」と。「俺は剣を崇拜してるんだ。なんだお前は、毛唐の神を拜んでいて何言うんだ。おまえ国賊だ。日本刀の味を示す、見せてやるから」と言って、床の間から日本刀を持ってきましてね、そして刀、ガラガラガラこう、差したり抜いたり、ガチャガチャさせておる。私はそこで笑いながら、「いやあ、村長さん、貴方から私斬られるというね、殉教者として、歴史に残るんだから、誠に幸いで御座る」「なにこの野郎！」てガチャガチャガチャガチャさして、とうとう抜かないでしまったの。そういうような、まあ、危ない経験もしました、そんなこともあったんです。私は殉教になりそこなったんですよ。

(成沢)：その樺太を切り上げましたのは何年ごろになりますか

(江賀)：はい、昭和七年の五月でした。ええ再び日高へ入ってきたんです。そしてその、姉茶コタンであるんです、荻伏の奥にですね、そこに私、駐在を命ぜられましてね。そこへ来たところが、うーん、そこに、大飲んべえの村太郎っていうのがいまして、それから、大ホラこきの太郎吉、それからバクチ打ちの幸吉と、いわゆる「三勇士」ですね。三勇士っていうのがそこにいるわけなんです。その人

たちにやはり、それも何も私をしたってきたんでないんでしょけど、そこがいわゆる神様のお導きですね。みんなこぞって参りましたねえ。信仰に入りました。そして私の片腕になって浦河の街へ行って、大きな太鼓でもってですね、路傍伝道しました。その太鼓でいうのもいわゆる樺太から、樺太伝道したときに吹沢判事さんが献き……捧げて下すった太鼓です。今、私の家にまだそれがあります。

その太鼓たたいて、浦河の人らみな知っている筈です。今から三十年前のことはね。ところがこの幸吉さんのお宅で家庭集会をしました、ところがその幸吉さんのお父っつあんは、チヨマッカレっていう名前のおじさんなんだ、チヨマッカレ、このおじさんは大のヤソ嫌いなんですよ。自分の息子がヤソにとられたって憤慨してるって話、陰で聞いてたんだ。いつか来るな来るなと思ってた。ところが、幸吉兄弟の家で家庭集会始めて、いま始めようとしたときに、その、胸にちょっときたものあるんだね、いつもなら賛美歌を三つぐらい歌って、それからお祈りして、それから聖書を読むんですけど、何だか胸騒ぎするんですね。いわゆる虫の知らせあったんです。「あ、今晚は先にお祈りしましょう」と言って、お祈りしたんです。何かしら今晚、問題あるということは言わなかったけども、私の胸にこう、響いてきたものある。それからお祈りして、いまお祈りしてしまったところへですね、戸ガラガラッと入ってきた者ある。いわゆる、白刃の氷したたるがごとく、という少し大げさだけど、ピカピカ光った日本刀振り上げてきたんですね。ちょうど戸開ける、まっすぐこう来る、私はちょうどこうする、ここにあのう、炉がある、昔の炉ですね、

その炉に焚火してある。私、ちょうどこの真ん中におる、あとの兄弟たちは十四、五人、女男まるくなって、いま集会始めたところなんです。「このやろ、この流れ者！」と言って入ってきた、いきなり、ちょうどこの左の肩をやったですね。

私、動かないの。入ってきたけど私はもう、動かないんですね、ずうずうしいんだね、私も。ひょっとこうただ頭こうやっただけで、もう、はーっところ来たんです、したけど、切りつけたけども、斬ったかどうだか、そのうちにランプは消える、電灯がないですから、ランプがボタンと消える、さあそこでそう雑になってもう大騒ぎになった。私は少し脇のほうへこんど離れていったけれども、まあ小一時間ほどそこで上を下へ大騒ぎ始まりました。とうとう、じいさんが刀とられて、そのじいさんも家へ連れられていったらしい。そういうこともあったんです。そして、今度は、若い者たちは、こんど第二次会だと言って、教会へ引き揚げてね、教会でその、感謝会をもう一回やったっていうようなことある。そういうようなこともありました。誠にこれは、まあ、姉茶のコタンにいわゆる開拓伝道に来て、殺されるようなこと、そんなこと、おかげさまで、斬られたけども傷はつきませんでした。

ほんとにわたし何もべつに、魔術を使ってのろいをあげてたわけでもないんですよ。けどただイエス様というだけだけしか考えてないんです。イエス様、もうイエス様ちゃんと守って下さるから、たとえそれ斬られて死んでもかまわないんだから。もう捧げてあるからだから、というふうに考えてたから。

(成沢)：まあいたくこのご苦労の連続のよ

うですが、この静内町においでになったって
いうことには、いろいろお考えやらご事情が
あられたと思うんですが、そういう点は、い
かがなもんですか。

(江賀)：ええ、その長万部のね、役場に戸籍
係として勤めている間に、感じたことはやは
り、ウタリばかりでない、シャモであっても
同じことですけども、戸籍にあんまりこのみ
んなが、無関心だっていることですね。ええ。
子供できて三年も四年も構わない、届け出
さなかつたり、あるいは、子供できて夫婦
届もしないでいたものもある。また、その夫
婦たるやその、細君の戸籍ないなしに子供で
きてらって、なんていうのもたくさんありま
してね、それではかわいそうだと。それから
もう一つは、戸籍の問題でもって、財産で
すね、土地の問題でもって非常にこのイザコ

ザがあるんですね。大して損することがある
んですね。どうしても戸籍の問題とこの土地
や財産の問題はあいくつついているようなも
んですから、ひとつ何とか救済してやらなき
ゃならないと。ために、まあ、代書人なって
やろうと、いうふうなつもりでまあ、行政書
士と司法書士と始めたわけなんですよ、はい。

(成沢)：先生最後に何か賛美歌をひとつ、お
聞かせ願いたと思うんですが。

(江賀)：はい。「我らの国は天に在り」です
ね。アイヌの言葉で「ヤイコブンテコタン」
これパチラー先生のおつくりになった歌です
ね。一節だけ歌いましょう。⁽¹⁶⁾

[中略]

おわりです。

(成沢)：どうも、ありがとう御座いました。

3-3 江賀寅三年譜

年. 月. 日	こ と が ら
1894.12.5	長万部村に生まれる。9歳のとき江賀次郎の養子となり江賀姓に。
1908.	長万部高等小学校卒業。
1910.4.	北海道旧土人教育会虻田学園(実業補習学校)に入学。
1910.7.16	終業式。第三学年編入の証書を受ける。
1910.7.22	有珠山噴火。このため学園閉鎖。同学園教員吉田巖の計らいにより、虻田の明石和歌助の 下に寄宿し獣医の勉強を続ける。
1912.	春から、吉田および道庁視学山崎恒一の計らいにより札幌の山崎宅に寄宿し勉学。
1913.3.	末頃、沙流郡新平賀尋常小学校代用教員に任命される。
1913.8.	静内郡高静小学校にて開催された日高管内の教員講習会に出席。
1913.9~1914.3	浦河准教員養成所に学ぶ。4月に准教員免許を授かる。
1917.1.10	勇払郡鶴川のキリスト教伝道者辺泥五郎と出会う。
1917.2.11	ジョン・パチェラーより洗礼を受ける。
1917.2.28	平取尋常小学校准訓導に任命される。
1918.4	新平賀のアイヌ23名、浦河支庁に宛て江賀寅三の新平賀への転任を求める「陳情書」を提 出。

(16) アイヌ語賛美歌「ヤイコブンテコタン」については『戦うコタンの勇者』247~251頁も参照。また、江賀寅三の戦後の静内での伝道活動をよく知る森崎幸雄、森崎マツエ両氏によれば、江賀寅三がこうしたアイヌ語の賛美歌を歌うのは聞いたことがないとのことである(1995年8月25日の聞き取りによる)。

年. 月. 日	こ と が ら
1918. 5 .12	静内郡遠佛尋常小学校准訓導に任命される。
1918.11	道庁長官俵孫一らが遠佛尋常小学校を視察。
1918.	札幌で開催された「北海道博覧会」を視察。
1921. 3 .31	遠佛小学校廃止、教員を退職。
1922. 3 .20	浦河支庁長にあて「旧土人児童教育規程廃止ニ関スル意見書」を提出。
1922.	秋、東洋宣教会聖書学院（東京市淀橋柏木町）に入学。
1923. 8 .	脚気の療養を兼ね帰郷、新平賀で伝道生活に入る。聖書学院の学業は通信教育の形で継続、翌年4月卒業。
1925. 4 .12	パッチェラーに宛て、聖公会脱会を告げる手紙を記す。以後、独立伝道に入る。
1926. 5	「基督教信仰会アイヌ団体」代表者として道庁にあて日高静内村農屋メナシベツ給与地の申請（却下。1929年静内生活改善会々長原島袖三名の申請により許可）。
1927. 4	東洋宣教会ホーリネス教会から福音使の辞令を受ける。 旭川で伝道活動。
1928. 7	サハリンへ伝道、一時旭川に戻り再度樺太へ。
1929. 3 .27	東洋宣教会教職者に任命される。
1932. 6 .	北海道日高へ戻る。荻伏村（現浦河町内）姉茶で伝道活動。
1935. 7 .10	道庁が開催した「旧土人保護施設改善座談会」に「旧土人先覚者」10名の一人として出席。
1938. 2 .	吉田巖を通じた依頼により、「自叙伝を骨子とし」てアイヌの「生活現状」などを綴る文章の執筆に入る。原稿は翌年6月頃吉田に送付する。
1938. 5 .	東洋宣教会から姉茶の教会への補助打ち切り。教会解散へ。
1938. 8 .	長万部に移る。
1940. 1 .15	長万部町役場戸籍係に勤務。
1940. 4 .16	発起人となり長万部「アイヌタリ一納税組合」設立。（『アイヌ伝道者の生涯』では18日）
1944.	静内町に移る。行政書士に就業。
1946.	発足した北海道アイヌ教会の理事となる（1964年まで）。
1947.	司法書士の資格取得。
1951.	静内町議選に立候補、落選。
1952.	日高へ伝道に訪れた国際福音宣教団を支援。
1953.	日高教育研究所発行の『日高教育情報』に「アイヌ教育史話」を連載。
1957. 7 .27	静内町がアイヌの民具などを収集し開設した郷土室の「入魂」のカムイノミに参列。（『北海道新聞』7月30日付胆振日高版）
1962. 8 .	札幌新生教会を訪ね伝道の再開を伝える。森山論らにより「アイヌ伝道内地宣教会江賀寅三後援会」設立。同年「江賀寅三自叙伝刊行後援会」設立。
1963. 2 .	日本イエスキリスト教団東京教会（東京都杉並区荻窪）にて江賀寅三激励会開催。
1964. 2 . 9 ,15	太平洋放送教会による江賀の対談を収録したテレビ番組「世の光 人生を語る」日本放送テレビより放送。道内では北海道放送により2. 9, 16放送。
1964. 7 .1	『歌うコタンの勇者 アイヌ教育家・牧師・江賀寅三伝』刊行。
1964.12.27	NHK札幌製作による江賀を取り上げたドキュメンタリー「ある人生 われらウタリに」放送。
1966. 7 .26	「北海道青少年健全育成推進功労者」として知事表彰を受ける。
1966. 9 .17	北海道による「北海道開発功労者の声」の一人として江賀の談話を録音。
1968. 4 .18	静内に教会設立なる、献堂式。
1968. 6 .28	死去。6. 30告別式。

付記

- これまでの調査で、下記の諸機関・個人にお世話になった。記して感謝したい。
東京聖書学院 静内新生教会 札幌新生キリスト教会 北海道立文書館 日本基督教団元浦河教会 森崎マツエ 森崎幸雄 梅木孝昭 渡辺シゲ 斉藤裕子 鍋澤強巳 黒井茂、遠藤龍彦
- 本稿脱稿後、静内新生教会佐藤信彦牧師のご教示により、教会堂建設前後の新聞記事など数件の資料を知ることができた。本目録に収めることはできなかったが、ここに記して感謝したい。